

平成 30 年 5 月 14 日現在

機関番号：10101

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K20823

研究課題名（和文）第一次世界大戦の戦前から戦後期にかけての『自衛 独立ユダヤ週刊新聞』の活動状況

研究課題名（英文）The publishing work of "Self-Defense Independent Jewish Weekly News" from the beginning to the end of WWI

研究代表者

中村 寿 (Nakamura, Hisashi)

北海道大学・文学研究科・専門研究員

研究者番号：40733308

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,400,000円

研究成果の概要（和文）：『自衛 独立ユダヤ週刊新聞』はドイツ語によるユダヤ民族主義の宣伝新聞である。ヘルツルのシオニズムが「ユダヤ人国家」の建設を志向していたのに対して、『自衛』は、オーストリア民族連邦の枠内でのユダヤ民族による自治を構想していた。『自衛』は、オーストリアのユダヤ民族の存在意義を民族対立の調停者に求めた。この役割からは、多民族国家におけるユダヤ人の自己同一性をめぐる議論の所在を指摘できた。オーストリアのユダヤ人による調停者としての使命の認識は、国民国家としてのドイツ帝国のユダヤ人からは提起されえなかった視座であった。

研究成果の概要（英文）：“Self-Defense - The Independent Jewish Weekly News” contemplated the possibility of Jewish autonomy in the Austrian national federation, while Theodor Herzl intended to build the “Jewish State.” In “Self-Defense” of the period of WWI a unique future view was suggested. According to this vision, Jewish people would join in an Austrian national league as a national group enjoying political rights equal to Germans, Czechs and other nationalities. “Self-Defense” understood the *raison d’être* of Austrian Jews as an intermediary between nations. The roll of an intermediary for national struggles was derived from the discussion about Austrian Jews’ identification as Jews belonging a multiethnic state. This was a self-designated roll of Austrian Jews. German Jews, being members of a nation state, could not take over that roll.

研究分野：ヨーロッパ文学

キーワード：ドイツ語ドイツ文学 東欧近現代史 ユダヤ人研究 ユダヤ人新聞 ナショナリズム

1. 研究開始当初の背景

『自衛—独立ユダヤ週刊新聞(Selbstwehr – Unabhaengige juedische Wochenschrift)』(1907–1938)は、オーストリア＝ハンガリー帝国ボヘミア王国期からチェコスロヴァキア共和国期にかけて、その首都プラハを拠点として出版を継続していたドイツ語によるユダヤ人新聞である。この新聞は前世紀転換期プラハのユダヤ系ドイツ語作家にとって、創作発表・相互批評の場となっていた。『自衛』は、当該都市のドイツ語文学をあつかう際には、その重要な媒体として言及されてきたが、資料へのアクセス状況の困難さから、その活動の詳細は明らかにされていなかった。報告者は、北海道大学文学研究科・文学部図書室所有のマイクロフィルムを使用して、2013年9月、『自衛』についての研究で学位を取得した。本研究は、学位取得のための研究を基礎として、その深化・発展を企図するものである。

2. 研究の目的

本研究のねらいは、『自衛』の活動について通時的な展望を与えることである。『自衛』はユダヤ民族によるナショナリズムの宣伝新聞であった。ユダヤ系ドイツ語作家はこの媒体を通じて、国民文化の構築に貢献するという作家の使命を自覚するにいたった。『自衛』の活動実績を明らかにすることは、ユダヤ系ドイツ作家にとっての関心の在処を示すことにもなる。また、ナショナリズム媒体の活動内容を明るみに出すことは、中・東欧諸国およびイスラエルといった国民国家の成立過程の一端を照らし出す試みにもつながっている。

3. 研究の方法

本研究は歴史文献についての実証研究である。したがって、文献の収集とその読解が作業の中心となる。読解の過程で報告者

が特に留意したことは、『自衛』を、ユダヤ人による思想史の潮流のなかに位置づけていくことであった。そのために取った手法は、『自衛』とそのほかのユダヤ人新聞の対照である。比較の際には、フランクフルト大学図書館に開設されているユダヤ人新聞のデジタルアーカイブの存在が非常に有益であった。

本研究は個人での申請であったが、共同研究としても研究を進めた。報告者は28年度から基盤B「プラハとダブリン、亡霊とメディアの言説空間 複数の文化をつなぐ<翻訳>の諸相」(16H03398)に研究分担者として参加した。分担者として立場から、ドイツ文学とチェコ文学の「仲介者」としてのユダヤ人作家の役割に注目して、一次資料の読解を進めた。並行して、共同研究「プラハの<ドイツ語文学>再考」(三谷研爾大阪大学教授)にも参加した。三谷教授との共同研究では、ボヘミア・プラハのような言語境界線上にある地域・都市の作家の同一性はつねに流動的であるということを学んだ。

4. 研究成果

【平成27年度】上述の、ドイツのデジタル化プロジェクトの関連資料を中心とする二次文献から、第一次世界大戦に対する『自衛』の態度は、賛成から批判へと推移していることが指摘されている。当該年度前期は、『自衛』の読解を進めるうえでの前提となる時代背景を再構成することに集中した。8月、「国際中・東欧研究協議会第9回世界大会(ICCEES 9th World Congress)」にて、パネルを企画した。パネルの討論者として、報告者はアメリカ合衆国ミシガン大学からスコット・スペクター教授(Prof. Scott Spector)を招聘した。9月にはウィーンのオーストリア国立図書館にて一次資料(『自衛』1912, 13, 14, 15年過去記事)を収集した。

10月以降、ウィーンで収集してきた過去記事の読解を開始したが、年度末までに論文として発表するにはいたらなかった。

【平成28年度】前年度に収集した『自衛』の読解を継続した。その結果、一次大戦期、ドイツ系ユダヤ民族主義者は自らを東欧ユダヤ人に同一化しようとしていることが分かった。プラハのユダヤ民族主義者は自らをドイツとチェコ文化の仲介者としてとらえた。彼らは東欧ユダヤ人をヨーロッパと中近東文化の仲介者と見なした。ユダヤ民族主義者は彼ら自身と東欧ユダヤ人との同一化を通じて、ハプスブルク帝国の東方侵略を正当化しようとした。基盤B「プラハとダブリン研究会」および日本独文学会シンポジウム「プラハの<ドイツ語文学>再考」では、上述の知見にもとづき、『自衛』の文芸欄掲載小説を分析した。最大の成果は、『自衛』についての論文が日本独文学会誌『ドイツ文学』に掲載されたことである。

【平成29年度】オーストリア社会民主主義はオーストリア諸邦(ハンガリー王国を除く)への民族連邦制の導入を構想していた。『自衛』は、ユダヤ民族がドイツ人・チェコ人ほかと対等な政治的権利をもつ集団として、この民族連邦に加盟することを画策した。『自衛』の民族主義は、テオドール・ヘルツルのシオニズムとは異なり、「ユダヤ人国家」の建設を目標にしているわけではなかった。当該年度はリヒャルト・ハルマッツの『ドイツ系オーストリアの政治』を読解の対象に置いた。社会民主主義者は、ボヘミア言語令(1880, 1897年)・普通選挙法にもとづく国会選挙(1907年)の延長線上に、民族連邦制の実現を展望していた。以上の成果を学会にて報告し、論文を刊行した。年度末には、再度オーストリア国立図書館にて『自衛』の旧号を収集した(1908, 1909, 1911年過去記事を電子データ化)。フランクフルト大学図書館では、デジタルアーカ

イヴの管理者ラーヘル・ホイベルガー博士(Dr. Rachel Heuberger)と面会し、アーカイブ構築の経緯・現状・将来構想についてのレクチャーを受けた。基盤B「プラハとダブリン」研究会では、ドイツにおけるユダヤ人新聞の保存・研究動向について報告した。

『自衛』はユダヤ民族によるナショナリズムの宣伝新聞である。しかし、この新聞は政治シオニズムとは異なり、ユダヤ民族による単独の国家建設を構想してはいなかった。『自衛』はオーストリアにおけるユダヤ民族の生存にとってハプスブルク帝国の存在は欠かせないと考えていた。帝国によるユダヤ民族に対する庇護の返礼として、彼らは帝国の民族対立を仲介する。オーストリアのユダヤ民族と多民族国家を相互依存の關係に置いていた点に、この新聞の独自性があった。

この新聞の背景には、社会民主主義者の構想する民族連邦制があった。ナータン・ビルンバウムや『自衛』はこの構想をさらにラディカルに推し進め、ドイツ人・チェコ人らと対等な政治的権利をユダヤ人にも適用させようとした。それと対照的な位置にあるのが、アドルフ・ヒトラーに代表される大ドイツ主義・国家社会主義である。ウィーン時代のヒトラーは民族連邦制構想を全否定し、ハプスブルク帝国とそのユダヤ人に対する憎悪心を露わにした。『自衛』を通じてオーストリア民族連邦制の諸相を解明することは、多民族連邦構想に対する批判としてのナチズムの勃興の過程を明らかにすることにも通じている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 3件)

中村寿、リヒャルト・ハルマッツによる

ユダヤ民族の位置づけ 『ドイツ系オーストリアの政治 オーストリアのリベラリズムと外交政策についての研究』、北海道大学ドイツ語学・文学研究会『独語独文学研究年報』(44)、2018、173-193、査読有。

中村寿、世紀転換期プラハのユダヤ系ドイツ語メディア、三谷研爾編『<プラハのドイツ語文学>再考』、日本独文学会研究叢書(123)、2017、21-34、査読無。
<http://www.jgg.jp/pdf/updata/SrJGG-123.pdf>

中村寿、オーストリアの市民、ユダヤの国民 『自衛 独立ユダヤ週刊新聞』、日本独文学会『ドイツ文学』(154)、2016、176-194、査読有。
https://www.jstage.jst.go.jp/article/jgg/154/0/154_176/_pdf/-char/ja

〔学会発表〕(計 8件)

中村寿、ドイツ語ユダヤ人新聞についての研究の発展可能性、「プラハとダブリン、亡霊とメディアの言説空間 複数の文化をつなぐ<翻訳>の諸相」研究会合、2018年3月26日、京都大学(京都府京都市左京区)。

中村寿、オーストリアにおけるナショナリズムの諸問題、『ブレーメン館』研究会、2018年1月27日、北海道情報大学札幌サテライト(北海道札幌市中央区)。

中村寿、リヒャルト・ハルマツツにおけるユダヤ民族の位置づけ、北海道ドイツ文学会第84回研究発表会、2017年12月9日、北海道大学(北海道札幌市北区)。

中村寿、『自衛 独立ユダヤ週刊新聞』その文芸欄を読む、『ブレーメン館』研究会、2017年2月18日、北海道情報大学札幌サテライト(北海道札幌市中央区)。

中村寿、世紀転換期プラハにおける国民

的ユダヤ運動の諸相：『自衛 独立ユダヤ週刊新聞』、北海道ドイツ文学会第82回研究発表会、2016年12月10日、北海道大学(北海道札幌市北区)。

中村寿、世紀転換期プラハのユダヤ系ドイツ語メディア(シンポジウム<プラハのドイツ語文学>再考)、日本独文学会秋季研究発表会、2016年10月22日、関西大学(大阪府吹田市)。

中村寿、オーストリアの市民、ユダヤの国民 第一次世界大戦前プラハのユダヤ人によるナショナリズム・メディア 『自衛』、「プラハとダブリン、亡霊とメディアの言説空間 複数の文化をつなぐ<翻訳>の諸相」研究会合、2016年8月5日、京都大学(京都府京都市左京区)。

中村寿、Citizens of Austria, Nations of Judaea: Selbstwehr Unabhaengige juedische Wochenschrift – Minority Nations' Issues reflecting on Czechoslovak Newspapers (川島隆、斎藤祥平、森下嘉之、Scott Spectorと共同発表)、ICCEES 9th World Congress、2015年8月4日、神田外語大学(千葉県千葉市美浜区)。

〔その他〕(計 2件) 翻訳と解説

中村寿訳、『自衛 独立ユダヤ週刊新聞』より「エリーザベト皇后とイエフダ・ベン・ハレヴィー」ほか二編、『ブレーメン館』(15)、2017、90-98。

中村寿訳、原作者不詳『被洗礼者』、『ブレーメン館』(14)、2016、90-100。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中村 寿 (Nakamura, Hisashi)
北海道大学・文学研究科・専門研究員
研究者番号：40733308